

ナホトカ港を出航
第二十一梯団 一九

九八人

昭和二十三年六月二十四日 舞鶴港に上陸

昭和二十三年六月二十八日 新潟県加茂町（現加

茂市）の生家に帰着

（新潟県 柴沢 正雄）

私のシベリア記 タイガーの冬

富山県 石川 正一

シベリア鉄道の支線の小駅スイソエフカの線路脇で一夜を明かした私たちマラリア患者の三人は、寒さに震えながら一夜寝床にしていた枯草を上手に燃やし、携帯していたコメをとがないまま、昨夜以来降り積もっていた雪を融かした水で炊いた。こうしてどうにか飯にありつくことができた。

さきにクラスキーノを出発した私の所属する見元大隊の五百人は夕刻前記のスイソエフカに着いた。本隊はそのまま行軍して木材伐採現場であるタイガーを目指して先行していたのである。

その夜、私たちマラリア患者の三人は枯草をかき集め部厚いベッドを作り、すべての衣服を着、防寒外套をはおり防寒帽で顔を覆いなんとか眠りにつくことができた。

翌朝ひどい寒気で目が醒めた。寝惚けまなこを

こすっては見たものの自分が今どこにいてどんな状況の下にいるかがわかるまでに、かなりの時間が必要であった。

それというのも私たちが疲れ切って寝込んでいるうちに雪が降っていたのだ。あたりを見回しても自分の体も隣の兵のねぐらも防寒帽で覆われた顔も、なにもかも新雪にすっぽり埋もれていたからである。私は文字どおり仰天した。雪の止んだ青い空だけが目に入った。

私は捕虜として昨夜からこの小駅に置き去りにされ、一夜を明かしたところなのだと理解するには更に何秒かの時間が必要であった。

その日もすでに夕方近くになり、また野宿かとかきらめかけていたときソ連兵がやってきてトラックに乗せられた。そして前日本隊の先着していた宿営地に着いた。

あたりはすっかり暗くなっていた。焚火が燃えている。疲れ切った仲間たちが火を囲んでごろ寝していた。

翌朝目覚めた私が気付いたことは、自分の持ち物すべてが盗まれていることであった。

敗戦後ずっと持ち歩いていた父母の写真も乏しい持ち物もなにもかも失くなっていった。

着こんでいた軍服と、はおっていた防寒外套、防寒帽だけが残った。こうして私は最初のシベリアの冬を着の身着のままを迎えねばならなかった。昭和二十一年十一月初めのことであった。

私がシベリアでの初めての冬を過ごすことになったスイソエフカ地区のタイガの収容所は、豊かな湧き水の外には、人間の生活に必要なものは何一つなかった。住まいも私たち自身で建てねばならなかった。二人用の大きな鋸とタポールという名の手斧の外にはなんらの道具もなかった。直径十センチから十五センチほどの松の木が兵たちの手で伐り出され、集められた。壁も床も部屋の間仕切りも天井も、ドアまでもすべて松丸太で作られた。屋根は必要なかった。天井が屋根の役割を兼ねることになった。天井の上に土が盛られ、

兵たちがしつかり踏み固めて屋根作りは終わった。あとには雪がすっぽりと積って防寒効果を發揮してくれるはずである。

兵舎の中央は土間のままで、そこには急造のドラム缶のストーブが赤々と燃えていた。だから兵舎内にいさえすればそれほど寒くはなかった。電灯もなかったが、私たちは、たちまち松脂や白樺の樹皮を上手に利用して灯火を作ることに成功した。

こうして兵舎ができた。私たちには本来の労役が待っていた。それは木材の伐採と搬出である。シベリア五葉松と樅もみの原生林が伐採の対象であった。

ノルマという言葉を私たちは初めて耳にした。後年すっかり日本語になったこの単語は、元来基準量という意味である。伐採には一人〇〇立米、搬出は××立米と樹林の密生度、緩やかな地形か急斜面か、好天か悪天候かでノルマは変えられるのが建前であった。しかし、運用面では必ずしも

そうではなく、誰もがノルマに泣かされるのだ。

事実、伐採しようにも附近一帯に樹木がなくなった場合でもノルマは機械的に課された。搬材の場合も例外ではなかった。伐採された木が殆んど集積されたようなときもノルマは変わらなかった。私たちは前日に運搬した木口に検収の印のある部分を輪切りにして新しく運んだように見せかけ、ソ連人の検収も気付かぬふりをして検収した。こうして我々抑留者も検収員もノルマを達成したことになるのである。

ソ連抑留中も帰国してからも、スターリンのいう第〇次五カ年計画が四カ年で達成されたとかいう記事を何度も読んだ。ソ連のいうノルマの達成とか五カ年計画の成功などというのは余り信用できないものであることを私たちは知っている。

宿営地に到着した夜、身につけていた被服の外は一切盗まれたことから、私は厳冬の屋外の作業に就くことが困難であったから屋内作業に従事することになった。そこは製材工場建設のための鍛

冶場のような小屋であった。

鍛冶場のカマンジール（長、責任者）は灰色の目をしたアレクセイという小柄な男がいてすべての作業を取り仕切っていた。彼アレクセイは職人ではあるがソ連国家の小役人でもあった。私たち抑留者の三人の仕事のでき栄えが良いと上機嫌であったが、そうでないときは露骨に不機嫌になり、私たちを口汚く罵倒した。対照的に、青い目のステパーノフは、おおらかで体の大きな男で彼の不機嫌な顔は見たことがなかった。体つきも頑丈で力も強く私たちが両手で使うハンマーも彼は片手で軽々と扱っていた。ロシア人らしいロシア人であった。アレクセイの不機嫌なとき、私たちが捕虜をなにかとかばってくれた。

アレクセイとステパーノフのいる職場で初冬の一月月ほどを過ごすことのできた私は、野外作業に出ることになった。被服に余裕ができたからである。説明するまでもないことだが病死者が始まったのである。

こうして私は、もう被服を必要としなくなった兵のお蔭で着替えの被服一式の支給を受けた。

人並みの被服の給付があった以上、厳冬の屋外作業に就くことは当然のことである。私も次の日から仲間たちと同様、早速伐採現場に出かけた。

私たちの隊にはシベリア五葉松の原生林が割り当てられた。樹齢百年は超えるであろう大樹を伐ることは凄まじい畏怖感が伴う。シベリアの苛酷な風土に耐え抜いてきたこれらの樹々は、エルマクがコサックを率い、シベリア征服の先駆者をつとめたことは知らないにしても、ブリヤート人やエヴェンク族が西方から押し寄せるロシア人に追われ、タイガーの奥へ、ツンドラへと移動を余儀なくされたことを見ていたに違いない。あるいは帝政時代の流刑囚のことやロシア革命当時の白軍と赤軍の戦闘のこともこの老いたる樹々は見ていたことであろう。

そして今、太平洋戦争の結果、敗残の日本兵という飢えた人間どもの一団がオレたち（老樹）を

切り倒そうとしているのだ。私には、この老いたる樹々がそんなふうには述懐し、鋸をタポールを入れる者たちをのろっているように思えた。

しかし、私たちは「捕虜」であり、あの忌まわしいノルマがあった。感傷が許されるはずがない。こうして亭々と聳えていた老樹は片端から伐られていった。

北朝鮮から持ち込んだ防寒被服は、シベリアでの終日の屋外作業に十分耐えるものではなかった。そうしたことから防寒靴だけではあったがロシア式のフェルト製の防寒靴が支給された。防寒効果は高く足指の凍傷に泣く兵はいなくなった。だが脚の短い日本人にとっていかにも行動性の悪いものであった。

伐採作業の当初は作業現場も近くそれほど苦にはならなかった。だが作業現場が遠くなるにつれて、鋸もタポールも、そして防寒靴までが、いよいよ重く感じられた。

私たち捕虜には当時のソ連の一般市民よりは多

い目の食糧が支給されるとされていた。熱量的にはそのような最低限の保証があったはずであるが、その内容は大豆粉であったり、小豆であったりした。特にビタミンCの欠乏に起因する壊血病、ビタミンAの不足に伴うトリ目（夜盲症）、消化障害、恒常的な下痢症状が進行して老兵たちはたちまち衰弱していった。彼らはもはや自らの意志で歩く力を失いかけていた。

作業現場への往復が精いっぱいといえる冬になった。虱が発生したが下着を洗濯する設備も時間もなかった。虱は首すじから這い上がって頭髮にまで侵入したが、彼ら老兵たちはそれを捉え潰そうとはしなかった。そんな気力はすでに失われていたのだ。

彼らが歩くたびに防寒帽は目深にずり下がって視野を狭くしたが、それをたくし上げようとはしなかった。そんなことのために手を動かすことなどとてもできることではなかった。彼らにできることといえば頭ごと後に反らすことぐらいであった。

若い兵や比較的健康状態のよい仲間たちがロープを掴ませてやったので彼らはそれにすがって、ただ作業現場に行き、ロープにすがって兵舎に帰った。

そんな衰弱しきった兵たちが最初の厳しい冬を越せるはずがなかった。乏しい持ち物と吸い残したタバコ、小袋に入っている一つまみの岩塩いわでし、そして手袋などを仲間たちに残し、兵たちが金槌かねてこを使って辛うじて掘った凍土に埋葬されていった。

長い、暗澹とした冬が過ぎ、タイガーに足早に夏がやってくるころ、ラーゲリの傍に彼らの墓標がたち並んでいた。白樺で作られた墓標の数は十本や二十本ではなかった（このラーゲリが閉鎖された時点で二十九柱とされている）。

シベリアでの抑留者の死亡率が異常に高かったのは、厳しい自然、苛酷な労働、特異な食糧事情に因ることはいうまでもない。私はその外に情報不足に伴う絶望感、タイガーなどでの隔絶感、虚脱症、無気力をあげたい。

貨車積みラーゲリ

シベリアの森林はタイガーと呼ばれている。タイガーがロシア語なのかシベリアの少数民族の言葉なのかは私は知らなかった。また、針葉樹林を指すのか、単に森林のことなのかも知らないでいた。最近知り得たことは、特に針葉樹林を指すのではなく文字どおり森林のことであるそうだ（2002年墓参の折にガイドから聞いた）。いずれにせよタイガーは南方という密林とは違い私の感覚に従えば疎林というのがふさわしい。そのことではブリーヤート人はタイガーに馬を自由に乗り入れることができるし、太古からの森林の民エヴェンク族が大トナカイにそりを牽かせて走り回ることのできる森林である。

そして特徴的なことは、ケードルといわれるシベリア五葉松、樅もみ、白樺、岳樺だけかんば、たも、科しななど限られた種類の樹木が集落をなして森林を形成していることである。私たちの作業大隊（赤軍労働五六九大隊）が冬の四カ月あまり伐採に明け暮れた

樹種はシベリア五葉松ただ一種といっても過言ではなかった。このように、この五葉松と樅が荒涼とした冬の原野に黒々と緑を残している。

私にとってこの五葉松は命の恩人である。それというのも、この五葉松の老樹には巨大な松かさ数十個もなっていて、それには大豆ほどの身が数十個もついているのだ。松の実である。松の実のかたい殻に包まれているから食用になる部分はい小豆粒ほどである。小さいが脂肪分が多く、香りのよい熱量の高い食べ物である。伐採に当たって私たち（比較的健康な）は真っ先に、その木の梢に松の実が多くついているか否かで木を選んだ。せつかく伐り倒してもリスにそっくり先取りされていることもあった。しかし、その松の実のお陰で私たちは栄養不足と空腹から救われたといえよう。

冬が去り春が到来するとタイガーには急速に夏がやってくる。岳樺の樹皮に切れ目をつけるのとちまち樹液が滴り落ちる。空き缶などで上手に汲

み受けると、それはまたとない清涼飲料となった。夏は山菜の季節でもある。ここみをはじめわらびによく似たしだ類が樹海一面に生える。なかでもここみは他のしだ類とは異なりアクがなかったのので私たちは、それを摘み取って茹で、すぐ食うことができた。

こうしてタイガーは飢えた抑留者にさまざまな食べものを提供し、生きる望みをつないでくれた。

また、秋のタイガーはゾロターヤ・オーセニ（錦繡の秋）といわれる。この季節、松や樅はタイガーの主役の座を白樺やたも、科などに譲る。秋はまた、きのこの季節でもある。八月も末ともなれば日本の晩秋の茸であるなめこが群生する。

昭和二十二年の暗い長い冬をタイガーで越した私は、樹海に生えた大量の山菜を食べ元気を回復していた。だが初秋、タイガーに茸が出始めたころ、マラリアの症状が出たため平地のラーゲリに移されることになった。転出するのはマラリア患者の外に衰弱し切った老兵たちも含まれていた。

残留の仲間たちから、おまえらは一足先に帰国することになるが我々がどうにか生きていることを家族に伝えてほしい……などといわれた。

しかし、私たち転出組は一足先に帰国できるなどとはもはや思わなくなっていた。最初の收容所であった北朝鮮、平壤郊外の三合里を出、鎮南浦に移り、そこから列車に揺られていくつかの港湾を通り越し、ついにこのシベリアまで来ているのだ。移動のたびに噂になった帰国話がいかに根拠のない、はかないものであったかを身に沁みて知っていたからである。

こうして転出組を乗せた、トラックは、タイガーをかい潜ってひた走りに走り、昨年の初冬、線路の脇で野宿した小駅スイソエフカに近いラーゲリに走り込んだ。

そこは、私たちがタイガーの收容所で伐採し、集積し、搬送されてきた木材を貨車に積み込むためにあるラーゲリであった。赤軍労働五六七大隊（略称十七大隊）のペールウィ・ロート、つまり

第一中隊の駐屯するラーゲリで木材集積場の傍にあった。

そこでは、周辺のタイガーから運び込まれる膨大な木材がおろされ、貨車に積み込まれていた。その外に屋根板を作る小グループや森林公団の職員宿舎での雑役務、近くにある航空隊病院の附属ホルホーズでの農作業など種々雑多な作業があった。

昭和二十二年の初秋のこの日から、二十三年初冬の帰国時点まで私はこの收容所で過ごすことになった。

十七大隊第一中隊に移った私にはまだマラリアの症状が続いていた。そのため中隊長のはからいで軽作業とされていたトマトの収穫手伝いのため航空隊病院の附属農場に移った。少し採り遅れ気味のトマトが待っていた。捕虜だとか社会主義国の農場だとはいえ、食べものを扱う現場である。私たちはそこで心ゆくまでというのか、好き放題に採りたてのトマトを食うことができた。

農場で新鮮な食べものを摂ったせいかな私は元気を回復していた。マリアアの症状も治まったので、農場に未練を残しながらもほどなく原隊に復帰した。本来の仕事である、トラックからの木材おろしと木材の貨車積みが私を待っていた。

体力は十分回復していた。それは農場で、新鮮な食べものを摂取しただけでなく人間の世界に復帰したことの安堵感で一層増幅されたのだ。タイガーのラーゲリでの人間といえれば我々と数人のソ連軍の警戒兵、そして木材運搬のトラックに便乗してくる何人かの木材検収員だけである。それに比べこのラーゲリでは警備兵の外に森林公園の職員やその家族、鉄道員、トラック乗務員、コルホーズ農民、軍関係以外のいわば民間人に接触することができた。

また、タイガーで見る空は、樹々の梢からかいま見る狭い空であった。だがこの貨車積みラーゲリの空は無限に広がっていた。そしてこの二つのことがタイガーでの隔絶感、絶望感からくる捕虜

ボケを癒すうえで大きな役割を果たしてくれたことを痛感したのである。

捕虜といえども労働者階級が支配していることが建前になっている社会主義の国、八時間労働は厳守されていた。ただ、日中の通常の作業を終え、ラーゲリに帰って夕食を終え湯茶などで空腹をごまかして寝に就こうとするとき、木材専用の無蓋貨物列車（ベルトーシカという）が音もなく滑り込んでくることがあった。そんなとき、私たちがペールウィ・ロートの仲間が否応なしにホームに駆けつけ、早速貨車積み作業に取り組みねばならなかった。

昭和二十二年の暮れから翌二十三年の厳冬期の貨車積み作業は言語に絶する苛酷なものとなった。わけでも長材積載の場合が苦しかった。直径三十センチから六十センチ近くもある長さ五メートルの木材は通常は一カ所分隊約十五人で取り組む。まないた状の無蓋貨車の片側にストイキと呼ばれる木の杭を立て、線路脇に積み込まれている木材を口

ープで巻き上げて、それは行われた。なお、二段目からは両面を平らに削って作った木のレールを敷く。貨車には輪棒りんぼうという丈夫な丸太が差しかけられ、木材は転回しながら貨車上に転がり込む。

木材は太さに応じて四段から五段ぐらいに積む。最初の段階では、木材の置き場所は比較的高く、積み込む位置も低い。貨車に差しかけた輪棒の傾斜もそれほど急ではない。だが、積載が進むにつれ、材の置き場は低くなり、反対に貨車側は高くなってゆく。輪棒の傾斜は益々強くなる。

木材の巻き上げが最上段ともなり、材が太い場合は輪棒の上で一進一退を繰り返す、なかなか貨車上に届かない。ロープは寒気のため硬直してくる。それを握りしめて巻き上げる手は凍え、防寒手套はいてついて力が入らない。兵たちの疲労も限界になる。輪棒には歯止め役の兵が二人いるが彼らの疲労もまた激しい。貨車上には巻き上げと合図役の兵が二人いて、ロープを引き上げ、声を限りに、「よいと巻いた」と叫ぶ。貨車の反対側に

は巻き上げ組がいて、「そーら巻いた」というように呼応する。だが、彼らの声は烈風に掻き消され、掻き消される。そんなときは隣の貨車の仲間たちが駆けつけて助け合う。

こうして終夜の貨車積みが終わるころ、冬の長い夜も白み始める。彼らがラーゲリに帰り暖をとる、朝食を終えて泥のように寝込んだころ、貨車の入れ替えがあつて、また貨車積みに駆り立てられることもたまにはあつた。

そんな、真冬の深夜は氷点下三五度以下ではなかったかと思う。風の強いときの体感温度はさらに低いものとなった。

帰国してから深夜の貨物列車の汽笛を聞くたびにあの厳冬の貨車積みが思い起こされた。

昭和二十三年の夏、私の所属する十七大隊のペールウィ・ロートでも、民主化運動の嵐が吹き荒れていた。『日本新聞』という、B5判の新聞が配付された。それは、ハバロフスクに本拠を置く、日本人「捕虜」の中の「反ファシスト委員会」の

名によって刊行されていた。

私たちはその新聞を通じて、帝国主義とか資本主義、あるいは天皇制国家における地主制度、それらに起因する侵略戦争とか植民地政策などについて学習することになった。

その頃まで全く聞いたこともない、日本の社会主義者の片山潜、徳田球一、志賀義男等々の名も知るようになった。

民主化運動は、資本主義批判、ファシズム撲滅を掲げた学習運動にとどまらなかった。社会主義陣営の拠点たるソ連邦の強化が、即、資本主義を駆逐し、そのことが世界平和につながるとする論理でそれは強行された。

スタハーノフ（凄い炭鉱夫で十四倍のノルマを達成した）という桁外れの働き者のため、私たちは一連の増産運動に動員される破目になった。私たち「捕虜」にとって彼、スタハーノフは、迷惑この上もない存在であった。

後記

筆者は敗戦時北朝鮮平壤にあった陸軍航空廠で軍属として勤務していた。そのことが幸いして敗戦から一年ほど北朝鮮で過ごすことができた。翌昭和二十一年九月に入ソ、二十二年の冬をタイガの收容所で働いた。敗戦二年目の冬ではあったが五百人中、二十人ほどの死者があった。敗戦時の入ソ者の死亡率が高かった。幸い帰国することができたが死没者のことを思うといまでも断腸の念を禁じ得ないのである。

【執筆者の紹介】

住所 富山県西礪波郡福岡町赤丸

大正十五年十月二十四日生

昭和十六年四月一日 陸軍航空廠に入隊（岐阜県

各務原）

昭和十九年二月 平壤陸軍航空廠に転属

昭和二十年八月 平壤にて敗戦

昭和二十一年九月ソ連領に入り昭和二十二年九月

までスイソエフカ地区で木材伐採に従事
昭和二十二年十月から昭和二十三年十月末まで木
材貨車積み作業
昭和二十三年十一月 ナホトカより帰国(舞鶴港)
財団全抑協入会現在に至る

(富山県 山田 秀三)

七年間孤独の闘いから生還できて

石川県 蔵 久雄

一、第二の人生のあゆみ

この世に生を受けて私の青春時代もいつしか過ぎ去ってしまいました。

今、七十五歳にして戦後四十数年間の仕事に終止符を打つこととなりました。そしてやっと、心の中にも、肉体にも安らぎができてきました。

これから老人社会の仲間にならざるにいたり、自身のことからの生き方を書き記したいと思いません。

私は子供の頃から小鳥の飼育が好きでした。戦後帰国後、小鳥の鳴き声で目を覚まし、その一日の仕事が始まったものです。その小鳥の鳴き声が仕事への励みと心の支えになっていました。

現在、趣味として色々な鳥を飼っています。カナリヤも多く、雛から成鳥になるまで十カ月かかり、毎日百羽前後の世話で一日が終わってしまう